
日常の狭間で

蒼井 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常の狭間で

【Nコード】

N4403H

【作者名】

蒼井 雪

【あらすじ】

予備校からの帰りの電車。すっかり寝入った俺が慌てて降りたのは、外灯1つの無人駅だった。

第1話 非日常の始まり

予備校帰り、電車の中。

遅いから夕飯も済ませてきてて。

結構空いてる車内に、一番隅の席。

揺れる電車と、規則正しい音。

これが、眠くならずにいられるか・・・

「・・・ここ、どうじゃ。」

次に目を開けた瞬間、俺の思考は固まった。

「うつわ、さみいつ！」

慌てて降りたその駅は、外灯1つのこじんまりした建物。
時刻表を見ながら、腕時計を覗き込む。

最終	22時47分
現在	23時03分

「って、もう上り電車ねえじゃん。」
「うそっ。」

へ？

俺の声に、なぜか女の声が重なる。

後ろを振り返ると、ちびこい女が俺の後ろから時刻表を覗き込むように立っていた。

「え、下りは？」

言われて気がついて、時刻表を確認すると。

「23時02分。」

今乗ってきた電車が最終かよ。

がっくりと肩を落とす。

「やだ、どうしょ。駅員さんいないのかしら・・・。」

女はそう呟くと、改札口のほうに歩いていく。

俺はその後姿を見ながら、行ってしまった電車の方向を見た。

「乗ってた電車の、終点より手前では降りれたってか。」

どれだけ寝てたんだか。

路線表を見ると、自分が降りるはずだった駅は随分と前に通り越していて、あと4駅いくと終点だった。

「ていうか、終点で降りたほうが、でかい駅じゃねえか。」

終点は、誰でも知っていきそうな大きな地方都市。

・・・ここからだ、あの山越えるのか・・・？

電車が走っていった方向にそびえる、さほど高くない山が目に入る。真っ暗な闇の中、もっと深い闇を見せていた。

さすがに山越えるのは無理だよなあ。

ぼやっ・・・と立っていると、後ろからさっきの女が歩いてきた。

「ここ・・・、無人駅だわ・・・。」

小さなバッグを抱えて、俺を見る。

「学生さんも、乗り過ごし？」

薄いメイクに、染めてないだろうセミロングの髪。
小柄な彼女は、困ったように右手を頬に当てている。

「そうだけど・・・、おねーさんも？」

「あはは、そう。」

2人で大きく溜息をつく。

「とりあえず寒いから、待合所に行かない？薄暗いけど部屋になつてるから、寒さはしのげそうよ。」

さつき確認してきたんだろう方向を指差しながら、彼女が笑う。

「うん。」

とりあえず頷いて後ろをついていった。

待合所はそんなに広くない場所で、長椅子が壁際に1つ、自動販売機とゴミ箱が角に置かれている。

電気は自動販売機と小さな裸電球だけで、別に不自由はしないけれど少し暗め。

「私はいいけど、学生さんはまずいんじゃないの？ご両親、心配するでしょう？」

その言葉に、そうだ！と手をたたく。

「携帯でタクシーでも呼べばいいんじゃないですか？ちよつとまってくださいよ。」

「あらいい考え。でもその前に、親御さんに連絡しないとね。」

鞆から携帯を取り出すと、そう彼女が言うから、俺は母親にメールを打つ。

「あら？友達のとこに泊まってくる・・・？って、学生さん。家に帰らないの？」

携帯を覗き込んで、俺が打っているメールの内容を読む。

俺はそれに答えずに、さっさと送信した。

「もとも友達んちに泊まる予定だったんですよ。ちょっと、家、面倒なもんで。」

それだけ言つと、携帯のネットでタクシー会社を検索する。

「あら、反抗期？若いな、青春く青い春。」

「いや、違うし。あ、おねーさん。番号覚えてもらえます？」

書くのが面倒で、口頭でおねーさんに伝える。

一度ネットを切つて、タクシー会社の電話番号を押したその瞬間。

「あ。」

甲高い機械音をさせて、携帯の充電が切れた。

「あら、充電切れちゃったわね。」

おねーさんの、声。

一瞬の沈黙。

「おねーさん、携帯、貸してもらえます？」

俺はいいけど、彼女をここに野宿させるのはさすがに……。

「ごめん、私、今日持つてないの。」

申し訳なさそうなその声に、一瞬心臓がバクンツと跳ねる。

「いや俺はいいんだけど。」

赤くなる自分に慌てながら両手を振ると、おねーさんはからからと笑う。

「私こそいいのよ、1人暮らしだし。心配してくれる人はいないんです。」

「やつ、でも……。」

少し俯き加減に彼女を見ると、何か気がついたらしく右手で俺の方を叩く。

「いや〜ね、学生さんに手なんか出さないわよ。」

その言葉に、がくつと肩を落とす。

いや違う、その反対……。

つて、いえねえかさすがに。

「おねーさん、なんか飲む？」

自分の中の気持ちにいたたまれなくなつて、そそくさと立ち上がる。スラックスに入ってる小銭を片手で集めて、自動販売機の前に行く。

「あら、私がおごるわよ。学生さんにたかれないし。」

ゆっくりと立ち上がろうとする彼女を、片手で制す。

「や、女におごらせられねえし。」

腰を浮かせていた彼女は、一瞬呆けていたが、ぷつ……と噴出す。

「ずいぶんと紳士ねえ。じゃあ、紅茶お願い。」

なんか馬鹿にされてる。

ちよつとむつとしながら、紅茶のペットボトルを2つ買つと1本手渡した。

「ありがとう。」

受け取りながら微笑む彼女は、確かに年上の雰囲気醸し出す。

なんとなく恥ずかしくなつて、そっぽ向きながら隣に座つた。

「私、さくら。学生さんは？」

蓋を開けながら既に飲み始めていた俺は、一口のみ干して手の甲で口を拭う。

「たかゆき。」

なんで苗字を言わないんだろうと思いつつ、同じように名前を伝え

る。

その彼女の顔が赤いことに気がついて、くん・・・と匂いをかいで見る。

「さくらさん、お酒飲んでる・・・？」

その言葉に、これまた大笑い。

「あはは、分かる？おかしいな、そんなに飲んでないんだけどな。」

「

「いや、顔赤いし。」

さくらさんは、人差し指を立てて俺に詰め寄る。

「わかんないわよ、たかゆきくん襲っちゃおうとか思ってるかもよ。」

「!？」

飲み込みそびれた紅茶が、口から勢いよく飛び出す。

「なっ何言って・・・。」

それを見たさくらさんは、椅子を叩きながら大笑い。

「本気にしてるーっ、あはは可愛い〜っつ。」

「こっ・・・この酔っ払い・・・。」

軽くイラッときながら、持っていたスポーツバッグからタオルを引き出して口を拭く。

床に飛び散った紅茶たちよ、明日には乾いてくれ。

そんなことを思いながらふと傍らを見ると、さくらさんがスポーツバッグから俺のジャージを引っ張り出した。

「私服まで入ってる、遊び人ね。」

「がばっ・・・とバッグの口をあけている。」

「なにしてんすか?!」

そのままジャンジを引き出すステップ・・・と固執で広げる。

第2話 彼女の理由

「あら、たかゆきくんて城東高なの？」

紺のジャージに白抜きの城東の名前。

なんだかよくわからない展開に、溜息をつきながらはいはいと頷く。

「そうですけど？」

紅茶をまた飲みながら、横目で彼女を見る。

「懐かしいわ、私も城東出身よ。」

「え?!」

ジャージに視線を固定したままの彼女は、懐かしそうに微笑む。

「もう、卒業して4年たつけどね。」

「じゃあ今は・・・。」

「新入社員、7ヶ月目ってところかしら。」

俺の言葉をついでにつこりと笑う。

その笑顔が少し寂しそうに見える。

「22歳のさくらさん、いい加減恥ずかしいんでジャージ返してください。」

嫌味のように言うと、反対にぎゅっと抱きしめて俺から隠す。

「うるさいわね、18歳のたかゆきくん。大人に意見するの〜？」

ぴたっとその動きが止まる。

「・・・汗臭い。」

「だーかーらっ!!」

今日は体育でサッカーやったから、汗しみこみまくってるんだって
!!

手を伸ばして取り上げようと彼女に近づくと、それよりも早く両腕

でジャージを抱きしめられてしまった。

「さくらさん、ホントいい加減に……。」

恥ずかしさに頭をかきながら彼女を覗き込む。

「あ……。」

なぜか、涙が零れていた。

「あれ、俺なんか言い過ぎました？」

彼女は横に頭を振る。

しばらくして彼女は、ごめんなさい、と呟いた。

「なんか懐かしくて。ごめんね。」

そういつてジャージを俺に渡す。

俺はそれを受け取って、スポーツバッグにしまいこむ。

彼女の、何か不安定なその表情を盗み見つつ。

「さくらさん、何かあったんですか？」

「え？」

両手で持ったペットボトルをころころと手の中で転がしていた彼女は、意外そうな顔をしながら俺を見た。

「だって、さつき泣いてたし……。」

あっけにとられていた表情をもどし、彼女は笑う。

「ストリートだなー、たかゆきくん。」

「子供なもんで。」

少し仏頂面で返すと、俺を見ていた視線を床に落とす。

「ほら、悩み事って話すだけで、結構気が楽になったりしないですか？とくに俺なんか、ぜんぜん知らない奴だし。」

彼女は溜息をついて、俺を見た。

「なんか非日常って、いいわね。それにたかゆきくんって、いい子だわ。」

そう言つて、また床に視線を移す。

「つまらない話よ。それでもいい?」

「いいですよ。」

嫌味にならない程度に微笑むと、彼女の雰囲気少し軽くなった。

「簡単でありがちな話。ずっと付き合ってた人からね、別れようつて言われたの。」

「・・・おっとー」

簡単でありがちで・・・一番返答に困る話だよこりゃ。

どう言えばいいかわからずに、とりあえずそのまま話を聞く。

「お互い仕事が忙しくてあまり会えなかったし、仕方ないことだとは思ってたんだけど。」

ふう・・・軽い溜息。

「あいつ、好きな人ができてね。相手に告白したんだ。その人の名前も聞いた。」

「え、それって・・・。」
「浮気?」

俺の言いたいことが分かったのか、さくらさんは首を振って笑う。

「浮気にしたくないから、多分別れたの。本気でその娘と恋をするためにね。」

律儀なのかよくわからん・・・。

「あいつの性格なんて、嫌って程分かるもの。」
「そういつて、俺を見た。」

「高校から、付き合ってたのよ。さっきのジャージで、走る姿をよ

く見てたわ。」

「えっ、2人とも城東出身？」

頷く、さくらさんの表情に陰がさす。

「だから分かるの。私に対して、凄い悔恨の情があるのがね。だから、笑って許してあげた。」

「さくらさん、強いなあ……。」

俺の言葉に、さくらさんの目から涙が零れた。

「強くなんでないわよ。懸命に自分を偽っただけ。イイヒトを演じたかっただけなのよ。泣いてすぐれば、もしかしたらまだ続いてもかもしれないのに。」

俺は何も言えずに、ただ聞いていた。

さくらさんの涙は止まらない。

「ふふ、さっきジャージごめんね。彼、あなたと同じくらいの体躯だったから。なんだか懐かしくって。」

泣きながら、俺に笑いかける。

「彼の目からは何が見えていたのかしらね。私には見る事のできない世界だわ。」

俺の胸の辺りまでしかない、彼女の身長。

きっとそんなことを言ったわけじゃないのは、分かってるんだけど。立ち上がって彼女を見る。

まだ涙の止まらない彼女は、不思議そうに俺を見上げた。

「失礼します。」

「え？」

なんとなく一声かけて、彼女の膝裏と脇に腕を差し込む。

「え、ちよつと・・・。」

驚いたのか、身を硬くさせた彼女を勢いつけて抱き上げる。

「同じくらいの身長らしいので。はい、その人の目線。」

自分の目線と同じくらいに彼女の目線が来るように、腕に力を入れる。

彼女は一瞬高さにびっくりしたのか、俺のシャツをぎゅっ・・・と掴んだ。

「たっ・・・たかゆきくん、大胆ねえ。」

びっくりした・・・と呟きながら、目をぱちくりさせてる。

「や、いつもはこんな俺じゃないんだけど。なんだろ、さっきさくらさんがいった“非日常”って奴に、浮かされてんのかな？」

どちらかといわれれば、硬派だと思う。

仲のいい女子なんて、数えられるほど。

さくらさんは軽く笑うと、改めて辺りを見渡した。

「高いのね、やっぱり。同じものを見ているのに、違うものを見ている気がするわ。」

緊張がほぐれたのか左手は離れたけれど、それでも片手で俺のシャツを掴んだまま。

「きつと、同じ時間を過ごしていても、人それぞれ感じ方も何もかも違うのね。近くにいても、同じではないのね・・・。」

「さくらさん・・・。」

泣き止んだ彼女がまた泣き出してしまふんじゃないかと上から覗き込むと、それに気がついたのか、もう泣かないわよ、と呟いた。

「非日常に浮かされて・・・か。私もそうよ、こんなに男の人と話すなんていつもならありえないもの。職場でもおとなしくくひたすらにこやかに、嫌味も何もかも笑顔で乗り越えてね・・・。」

声がだんだん小さくなっていく。

「私の彼に告白されたのが、例え私の友達でも・・・。」

さくらさんは、ふとおかしそうに笑い出した。

「よくそんな事私に言えるわねって思ったけど、後から知られるくらいならってことなのよ。まったく、気が小さいのかなんなのか。」

「さくらさん、悲しい時は笑うんじゃないよ泣いた方がいいよ。」

痛そうに笑うその表情に、見ていてこっちが辛くなる。

その言葉を聞いて、俺を見開いた目で見つめる。

「なんだか、女の扱い慣れてない？たかゆきくんてなんかすけべ。」

「ぼっ・・・、顔が熱くなる。」

「すすすけべって！！違うよ、ただ辛い時は泣いたほうがいいって・・・。」

そのとたん、笑っていた彼女の頬に涙が伝う。

「いやあね、もう・・・。我慢してるのに。そんな事言うから、また泣けてきちゃったじゃない。」

彼女を抱いたまま、椅子に腰掛ける。

身体を離そうとした彼女の身体を、両腕で止める。

「泣いてくださいよ、ほら。どうせ俺は通りすがりの学生さんですから。」

俺の言葉に噴出す彼女の表情が、だんだんと崩れていく。

「私だってね。・・・辛かったのよ、あいつに会えなくて。なのに、お前と会えない間に親しくなって・・・なんて、酷いと思わない？」

「うん・・・。」

「5年間で作り上げた私との関係より、たった数ヶ月しか知らない私の友達の方がいいなんて。」

「うん。」

「好きだったのに・・・、まだ好きなのに・・・!」

しゃくりあげるその声が止むまで、俺は彼女を抱きしめ続けた。

第3話 俺の理由

どのくらい経っただろう。

腕時計の針は、夜中の3時をまわっていた。

落ち着いたのか彼女は、腕を伸ばして紅茶のペットボトルを取った。

「あ、新しいの買いましたよ？冷たくなってるんじゃないよ。」
立ち上がるうとして動きを止める。

いけね、彼女抱いたままだった。

冷静に考えると、凄く恥ずかしいことをしている自分に、顔が真っ赤になる。

そんな俺を見て、彼女が俺の腕の中から離れた。

「私を買っつわ、今度は。同じでいい？」

微笑む彼女を見ながら、涼しくなった自分の腕の中に寂しさを覚える。

温かかったな……。

同じ紅茶を買つと、俺に手渡して隣に座った。

「いやだ、そんな寂しそうな顔しないでよ。」

「なっ、何言つて!」

自分の思考を読まれた気がして、一気に赤くなる。

気づかれたくなくて、さっさとペットボトルを開けて紅茶を飲み込んだ。

「たかゆきくんは？なんでお家に帰りたくないの？」

ぎくつ……と、彼女を見る。

ペットボトルに口をつけたまま、上目遣いにこちらを覗き込んでいる。

「さっきね、私の話聞いてくれて、とても嬉しかったわ。それに楽

になった。ホントね、たかゆきくんの言うとおりでわ。」

そして、ペットボトルの蓋を閉めて横に置く。

「同じよ、私も。通りすがりの社会人に、話してみない？」

「・・・社会人に見えない・・・。」

その言葉に、なによつ・・・と頬を膨らませる。

俺はそんな彼女を笑いながら見つめる。

「つままないよ、ホントに。」

「私だつて、つままない話聞いてもらったもの。」

笑いが途切れる。

「ありがちな話だよ、俺の方だつて。父さんが浮気して、母さんまで浮気して。離婚したけど、俺の居場所なくて。仕方なく、母さんの方にいるってそれだけ。」

溜息をつく。

「母さんに、女を見た気がして。気持ち悪くなった。」

ぎゅっ・・・と、俺の手が温かいものに包まれる。

俺の顔をじつと見ながら、彼女は手を握ってくれている。

「母さん、俺の母親っていう立場と、相手に対しての女って立場に、板ばさみ状態なんだ。こんなことになった罪滅ぼしに、大学のお金を全部出してあげるから許してっさ。」

知らないうちに、手に力が入る。

誰にも、言っただけのこと。

友達の家泊まるって言ってたけど、ホントはいつもネットカフェで時間つぶしてた。

そのために、私服持ち歩いてる。

制服のままじゃ、補導してくれって言ってるようなもんだから。

「許してやるためにいく大学って、なんなんだろうって思うけど。ずるがしこい俺もいて。まあ、行かしてくれるんならいいかって思ってた。嫌がってる母さんの金でさ。」

さくらさんは、何も言わない。

「だから、家に帰らないんですよ。俺が帰らなきゃ、母さんは相手と幸せに暮らせるから。・・・それに・・・居場所なんてないし。」

腫れ物を触るような、母さんの態度。

うっとおしいほど話しかけてくる、相手の男。

一緒に暮らしたら、そのすべてを認めてしまいそうで嫌だった。

ぺた・・・

「え？」

頬の温かい感触に、前を見る。

そこには、いつの間にか立ち上がって俺の前に来ていたさくらさんの顔。

彼女の触れる先に、俺の頬と俺の涙。

「え、あれ？なんで俺泣いてるんだ？」

びっくりして、腕で涙をふき取る。

その姿を、さくらさんはじっと見ている。

「たかゆきくん。」

呼ばれて、ふと顔を上げると、ぎゅっ・・・と頭を抱きしめられた。

「自分で言ってたでしょ。辛い時は泣けて。まったく、たかゆきくんは私より年下なのに、我慢強すぎるのよ。」

俺は、そのまま彼女の体温を感じている。

暖かくて、優しくて。

心地いい、心臓の音。

「さくらさん、胸、ない。」

「うるさいわね。」

恥ずかしくて、つい憎まれ口を叩く。

「寝てしまいなさいな、気を張りすぎちゃだめよ。」

その声が、心地よく心に響く。

「お母さんもね、あなたに幸せになってほしいのよ。どっやってそれを伝えていいかわからないだけ。」

こここのところネットカフェにずっといてよく寝ていなかったせいか、少しずつ眠気が意識を侵食していく。

「さくらさん、イイヒトだね。」

「ふふ、そうでしょ?」

笑う彼女から、与えてもらえる温もり。

・・・忘れていた、人の温もり。

「ねえ、元彼のことなんかさっさと忘れて、俺にしない・・・?」

一瞬動きがとまって、再び笑う。

「また、逢えたらね。考えておくわ。」

途切れそうになる意識を、懸命につなげる。

だるい腕を彼女の肩に乗せて、身体を引き離す。

「約束・・・だからね・・・。」

ぼやけてきた彼女の顔を、見つめる。

「・・・おやすみなさい、たかゆきくん。・・・いい夢を・・・。」

その瞬間、柔らかい温もりを唇に感じながら俺は意識を手放した。

第4話 目指すのは

「・・・おい、君。起きなさい。おい・・・。」
俺の頭に響いてくる声。

うつすらと目を開けると、スーツ姿のおじさんが目の前に立っていた。

「あ・・・あれ・・・?」

起き上がって、辺りを見回す。

昨日のまま。

待合所と自動販売機と裸電球とゴミ箱が。

「あれ?」

彼女が・・・さくらさんがいなかった。

俺を起こしてくれたおじさんは、俺を見ておかしそうに笑う。

「大丈夫かい? 昨日乗り過ごしちゃったの?」

「え・・・えと、はい。あの、ここに女のいまませんでしたか?」

おじさんは、ああ、と呟きながらホームのほうを見た。

「さつき、始発に乗って行ってしまったよ? 声をかけたら、次の電車がきたら君を起こしてくれて。」

つられて、ホームを見る。

明るくなってきている風景。

「大丈夫? もうすぐ上り電車来るよ?」

「あ、はい。」

その声に椅子から立ち上がる。

スポーツバッグと革鞆を脇に抱えると、おじさんの後についてホームに出た。

暗闇に包まれていた昨日の駅とは違って変わって、綺麗な風景が広がっていた。

深呼吸すると、冷たい空気が身体いっぱい広がっていく。

さくらさん。

絶対に、見つけ出してやる……！

電車に乗ると、俺は家に帰った。

母さんは驚きながら、俺を家上げる。

1週間ぶりの自宅には、相手の姿がない。

荷物を部屋に置いて、さっとシャワーを浴びる。

制服に着替えて居間に戻ってくると、母さんが気まずそうに俺を見る。

「あの人は？」

「もうすぐ帰ってくるわ。……昨日夜勤だったから……。」

病院に勤めている母さんの相手は、週に2日、夜勤を担当してる。

「そっか。」

そのまま俺の席であるはずの、椅子に腰掛ける。

母さんは、複雑な表情で俺を見ている。

「あのさ、言いたいことあって。」

「……何？」

この表情、何度見ただろう。

思いやる余裕なんて、俺になかった。

「母さん、俺にもう気を使わないで。俺は、父さんと母さんの事わかんないけど、母さんに幸せになって欲しい気持ちがあるから。」
「え……。」

想像していいことを言われたからか、呆気に取られる母さんに笑いかける。

「ごめんな、俺、間違ってたよ。」

「隆之……。」

「あ、でも大学のお金、1年分だけ貸して？あとは、自分で払うからさ。」

その途端、居間のドアが勢いよく開いた。

「何言ってるんだ！全部払うに決まってるじゃないか！」
「うおっ。」

熱血教師ちつくな相手が、駆け込んでくる。
びっくりして立ち上がる俺の身体に体当たりをかましながら、ぎゅつと抱きしめる。

「いつ、痛い！痛いよ！」
本当に痛い。

医者というより、体育教師にしか見えない。

「俺、父さんとは呼べない。それでもいい？」

一瞬、動きが止まったけれど深く頷いた。

「いいよ、それで……ありがとう。」

「母さんをよろしくね、雅夫さん。」

母さんの、嬉しそうな泣き顔が、心に残った。

俺のネットカフェ通いはなくなり、大学も両親に甘えることにした。そのかわり、1人暮らしをするつもり。新婚さんの家庭にいたくありません。っていったら、雅夫さんは出てけでけと笑っていた。

「なんだよ隆之。お前勉強励んでるな。」
図書室でセンター試験の勉強をしていた俺の横に、クラスメイトが寄ってくる。

「あんまりやる気なかったのに。」
「うるせえな、やる気が出たんだよ。」
さっさとそいつを追っ払う。

机に広げている参考書とノートの下に、一冊の卒業アルバム。

4年前の、彼女がそこにいる。

覚えていた4年前の卒業生という言葉と、さくらさんという名前。

図書館に置いてあった卒業アルバムからつてをたどって、彼女の職場を突き止めた。

受験が終わったら、会いに行くんだ。

彼女に、お礼を言う為に。

そして・・・

アルバムの彼女の笑顔を指で触れる。

早く会いたい。

早く。

アルバムを閉じると、ノートを開いた。

第5話 非日常から日常へ（前書き）

キスに関する描写が、出てきます。

そんなに深い描写ではないですが、15歳以下の方、苦手な方は閲覧を見合わせてください。

第5話 非日常から日常へ

3月。

さくらさんに会ったあの日から、5ヶ月。

受験は終わり、大学の近くにアパートも借りた。

あとは、入学式を待つだけ。

そして・・・

見上げるビル。

さくらさんがいるはずの場所。

この5階に彼女の勤める会社が入ってる。

驚かせようと建物の向かい側で、彼女を待つ。

覚えていてくれるだろうか。

忘れないでいてくれるだろうか。

ドキドキしながら、ガードレールに身体をもたせ掛ける。

制服着てないしな、髪伸びたしな・・・

しばらくして、会社員たちがビルから続々と出てきた。

来るかな、どこだろ。

出てくる人たちの顔を確認しながら、数十分。

「いた！」

最後の方、ほとんど誰もいなくなってから本当にこっそりという言

葉がぴつたりのさくらさんが出てきた。

きよるきよると辺りを見渡して、さっとビルの後ろの方へ走っていく。

何してるんだろ・・・？

不思議に思いながら、とりあえず後を追っていく。

道路を渡ってビルの反対側にでる。

「離して！」

ビルの後ろから、さくらさんの声がした。

慌てて声のしたほうに走って行くと、向こうにさくらさんと彼女の腕を掴む男の姿。

「離してよ！」

懸命に腕を振りほどこうとするが、男はもう一方の腕も捕まえて動きを止める。

「もう一度、やり直させてくれ！話を・・・っ。」

「聞きたくない！勝手すぎるでしょう？振られたから私に戻るって、馬鹿にしてるの？！」

「5年一緒にいた俺の気持ち、わかんねえのかよ。」

「わっかんねえよ、俺には。」

男の後ろから膝をカクツと軽く蹴って、さくらさんを抱き上げる。

「えっ！？」

急に目線の高さが変わって、さくらさんが声を上げる。

俺を見上げた彼女に、にっこりと笑いかける。

「あなた……。」

驚いて目を見開く、彼女が可愛い。

「こんばんは、さくらさん。やっと見つけましたよ。」

その言葉に、さくらさんは呆気にとられたまま俺を見つめている。

「お前、誰だ？」

「俺？彼女の彼氏。」

あっさりというと、男は一瞬口ごもったけれど俺めがけて食って掛る。

「そんなの、知らねえっ！」

その男の腹に、右足をかざす。

そいつは避けようとバランスをくずして、尻餅をついた。

「じゃ、今知ってください。もう変なちよっかい出さないでくださいね。先輩。」

「先輩……？」

地面に座り込んだまま俺を見上げる男の横の壁に、右足を振り上げて落とす。

ビクツ……と肩をすくめる男に、顔を近づけて睨みつける。

「分かりました？」

言葉と裏腹な、低い声で。

男は、黙ったまま頷くと肩を落とした。

その姿を見下ろして、細く息を吐きだす。

そのままその場所を離れた。

「あの……たかゆきくん？降ろしてくれないかな……。」

さくらさんが恥ずかしそうに、身をよじる。

ビルの後ろからそのまま人目の少ない小道に入ったけれど、それでも帰宅時間で少なからず人通りはある。

すれ違う人達から向けられる視線に、耐えられないみたい。

「嫌です。」

一言だけ答えると、そのまま足を止めずに歩いていく。

「ねっねえ……。恥ずかしいんだけど。」

俺のTシャツを無意識に握り締めると、恥ずかしそうに顔を伏せる。

「あの時、俺を1人残していった罰です。」

「そんな……。」

少しでも周りから見えないように、首をすくめる。

なんとなく可愛そうになって、あたりを見渡すと公園が見えた。

そこに入って、ベンチに彼女を下ろす。

「うう、たかゆきくんてこんなに強引だったっけ?」

「さくらさんだって、もっと気が強そうでしたけど?」

2人で言って、ぷっ……と笑う。

「ま、あれは非日常だったからね。」

さくらさんは、恥ずかしそうに笑った。

「さくらさん。俺ね、母親とその相手とうまくいくようになったんですよ。大学も受かったし、1人暮らしもはじめたんだ。」

その言葉に、さくらさんはふわっ……と笑う。

「頑張ったのね、たかゆきくん。」

いい子いい子と頭を撫でられて、ボツと顔が熱くなる。
やっぱり・・・、さくらさんだ。

あの時の雰囲気じゃなくても、この優しさとこの温かさは。
俺の会いたかった、さくらさん。

「あ・・・、でもさっきの男。よかった？俺、勝手にあんなことして・・・。」

さっきのは確実に、元彼だろう。

よりを戻したがっていたし・・・。

心配そうな表情で彼女を見ると、首を横に振った。

「さくらさん？」

「いいの。もうあいつに気持ち残ってないもの。」

「そう？」

だって・・・

そう呟く彼女は、俺に表情が見えないように顔を伏せる。

「さくらさん？」

そのまま黙ってしまった彼女を、覗き込む。

「なんでもない・・・。」

・・・

ふむ。

ベンチから立ち上がって、彼女の前に座る。

「さくらさん。」

俺の声に顔を上げる彼女の後頭部を、右手で抑える。

「え……？」

疑問の声を上げた彼女の唇に、自分のそれを重ねる。

「ん……?!」

やっぱり、そうだ。

あの時眠りに落ちる前に唇に感じた、温もり。

驚いた彼女は、俺の胸を押し返す。

俺はそれ以上の力で、彼女を抱きしめた。

ベンチに座る彼女の横に、右膝を乗せる。

びくっ……と彼女の肩が震えた。

驚かしすぎたらまずいか。

逢えたことがうれしくて。

彼女に触れられるのが嬉しくて。

ゆっくりと身体を離す。

さくらは、真つ赤になりながら両手で口を押さえている。

「俺に、キス、したでしょ。あの時。」

「!」

さくらの目が、めいっばい見開く。

「じっ、じめんねっ。あの……その……忘れて……っ。」

立ち上がるうとする桜さんの身体を、ベンチに押し戻す。

「なんで謝るの？俺、嬉しかったんだけど……。」

「え・・・？」

「ね、何で俺にキスしたの？」

言いよどむ彼女の頬を、右手で触れる。

「ね、さくらさん。」

「う・・・その・・・・・・いつ・・・愛しいな・・・と・・・。」

「

「え？」

小声で言うその言葉を、もう一度聞きたくて顔を覗き込む。

さくらさんはもう一度唸ると、早口でまくしたてた。

「私の話聞いてくれて、優しく包んでくれたあなたを愛しいと思っ

たから！こっこんな強引な人だと思わなかった・・・！」

俺を見た彼女の目から、涙が溢れる。

「わっ。」

なっ、泣かしちまった！！

「ごめんなさい！泣かせるつもりは・・・！」

慌てて彼女の涙を親指で拭う。

「嫌いっ、嫌いよたかゆきくんなんて！」

「うわっ、そんなこと言わないでください！ごめんなさい、謝りま

す！・・・！」

じつと俺を睨む、上目遣いの彼女にさっきから心臓がばくばくして
るのに、嫌いなんて言われたくないいいっ！

「あの、ごめんなさい。どうすれば許してくれますか？」

涙がおさまった彼女に、おろおろと聞く。

さくらさんは俺をじつと見つめて、溜息をついた。

「・・・もう少し、優しくして。」

ドキンッ

さくらさんは、俺の心臓を壊すつもりか……！

ゆっくりと、彼女の肩に触れる。

少しびくついた彼女の腕に、ゆっくりと這わせる。

「もちろん……。」

彼女の背中に腕を回し、ぎゅっ……と抱きしめる。

「あなたが好きです、さくらさん。……お名前を覚えていただけますか？」

さくらさんは恥ずかしそうにもぞもぞと身体を動かしながら、俺の腕の中で呟く。

「……綾瀬 桜。あなたは？」

「木田 隆之です。」

少し身体を離して、彼女の目を見る。

「……あの時の約束、覚えてますか？」

ほんのりと赤く染まった顔で、俺に微笑む。

「……覚えてるわ、隆之君。私も、あなたのこと好きよ。……
だっ……。」

少し恥ずかしそうに笑って、呟いた。

「あなたがいつ逢いに来てくれるか、ずっと待っていたんだもの。」

その表情に、くらっ……と眩暈。

「桜さん、我慢するのムリ。」

「え？」

彼女の唇を、奪う。

「んっ……。」

突然の事にびっくりしながら、さっきみたいな抵抗はなかった。

なら……

少し唇を離す。

恥ずかしそうに口を開いて息をしようとする彼女の唇に、再び自分のそれを重ねる。

「えっ……ふ……んっ。」

ほんのり開いていた唇から、舌を差し入れる。

驚いて身体をひねるように逃げようとする彼女を、左腕で抱きとめる。

頬に添えていた右手をそのまま後頭部にずらすと、彼女の身体の動きを止めた。

彼女は唯一動かせる手のひらで、俺のTシャツをぎゅっ……と掴んでいる。

「んっ、ちょ……や……っ。」

少し浮いた唇から、彼女の声が漏れる。

再び落とす口付けに、彼女の腕から力が抜けていく。

離れがたい気もするけど、ゆっくりと唇を離した。

がくっ……と彼女の身体から力が抜けて、俺の方に倒れこむ。

「桜さん……、ごめんなさい……？」

怒られる前に謝るところと声をかけると、彼女は潤んだその瞳のま
ま俺を見つめる。

「・・・やっぱり隆之君、すけべじゃない。」

桜さんの方が年上だけど・・・だけど・・・っ

「あなたが可愛すぎるのがいけないんですよ。」
そう言っつて、抱きしめる。

「大好きです、桜さん。」

やっと、彼女を手に入れた。

第5話 非日常から日常へ（後書き）

日常と日常の狭間の、非日常。

ファンタジーとかじゃないけれど、何かの間違いでたまに訪れる非日常を書いてみました。

知っている人より、知らない人のほうが悩みって話しやすいよな・
・なんて思ってた。

御覧ください、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4403h/>

日常の狭間で

2010年10月13日15時00分発行